

「それならばありがたい」

体を伸ばしたグレイはかすかに肩で息をしていた。ひそかな空気の流れに乗って、体臭が鼻をくすぐる。

昨日の夜、一晚中感じた匂い、そして重なり合った体温。

衝動的にグレイの背中を抱き寄せた。掌に伝わる湿り気が生々しい。

勢いで上を向いた顔の、小さく開いた唇に口づけた。

グレイは昨夜と同じように、抗わなかった。

舌を深く埋めこむ。グレイの口腔内を無遠慮に味わう。

熱の中で逃げる彼を追いかけた。舌が触れ合うと、グレイはびくりと身を引きかける。

昨夜は逆らわなかったかに。

逃すまいとさらに強く引き寄せた。

片腕で背中を抱き締め、片手で後頭部を押さえた。かすかな欲望が持ち上がりかける。夢中で捕え、

ゆっくりと吸い上げた。

顔を見てみたくて、薄目を開けると灰色の睫毛は細かく震えていた。

「んっ……」

咽喉の奥で小さく声を漏らして、グレイはホークの胸を押し返した。少しだけ、息を荒げている。

「……やりたいのなら、宿まで我慢しろ」

「そんなんじゃねえよ」

小さく胸に痛みが走った。

お前とは遊びだ、と念を押されたような気がした。

思わず煽りたてるような控えめな反応も、相手を弄ぶ手練手管だったのか。

「もうあんなことはしねえさ」

悔しまぎれに言い返した。グレイはかすかに眼を

睨り、一瞬後に睫毛を伏せた。

傷ついているように見えて、そんなはずはないと

思い直す。

昨日みたいに、誘うことなど平気な男なんだ。

悪かあなかつたぜ。俺も楽しかったし。

取り繕う言葉を飲みこんだ。そんな言葉をグレイは望んでいないような気がして。

「心配しなくてもやりたくなったら遠慮なく押し倒すさ」

いいながら明かりがさす方に足を向けた。

「もうそこが村の入口だぜ」

グレイは黙ってついて来る。どんな顔をしているかはわからなかった。

ゲッコの村の入口をくぐったとたん、たくさんの顔が振り返った。

大きく飛び出した爬虫類の眼が、二人を睨みつける。

ホークがゲッコ族の村のある洞窟に来るのは二度目だった。前に来た時とくらべて、友好的な空気になっただけとはお世辞にも思えなかった。

「……なんだか今回も望み薄、つて空気だな……」

絶望してつぶやいた。

「そんなことはない。お前はゲッコ族を助けた。きつとなにか情報をくれるはずだ。——あれが長老か？」

村の奥に立つ、ゲッコ族の中では豪華な衣装を身に着けた一匹を、グレイは目ざとく指差した。

グレイがそんなに言うんだ。もう一度話をしてみるか。

気は進まないながら、ホークはグレイの後に着いてゲッコ族の長老の前に立った。じろりと大きな眼で二人を見る。

「人間に話すことはなにもない、と言っただろう」

「ほらな」

だからいっただろう、と言外に含ませ、肩をすくめた。

グレイはかまわず、半歩前に出た。

「長。恩に着せるわけではないが、俺たちは囚われ